

「ねがいは水あめの詩に」を読んで

景安 朱里

今年の秋、喜多方市の北町の公園で祖母と遊んでいたときのことです。その公園には、あるおばあさんの銅像がありました。そのおばあさんの顔は、とてもやさしい笑みを浮かべていました。祖母は、

「この人は、日本のナイチンゲールと呼ばれた人で、わたしの大先ばいなんだよ」と教えてくれました。わたしの祖母は、看護師をしていました。病気で入院した人のお世話をしたり、採血をしたりして、たそうです。

大先ばいとは、看護師の大先ばいという意味だ。たそうです。祖母の大先ばい、すてきな笑みを浮かべているこのおばあさんは、どのようになことをした人なのだろう。これが、瓜生岩子さんの伝記「ねがいは水あめの詩に」がきっかけでした。

岩子さんは、とても芯の強い方だと感じました。戦争の中、自分もつらい思いをして、たことと思います。それでも人々を救いたいという強い気持ちを持ち、実際に人助けをし

たことがとてもかっこよく感じました。大変な生活の中でも、あきらめない気持ちを持ち前に進むとする岩子さんの生き方に感動しました。そして、ごき祖母と似ているように気がしてなりません。祖母が言う、

「大先ばいとは、き。と看護師としての心構えのことを言っていたのだと思います。」

また、自ら先頭に立ち、子どもやお年寄りをお救おうとした姿に、心を打たれました。特に、子どもの教育を心配し、学校を建て、教

育にかを入れ、子どもたちの悲しみや苦しみを笑顔に変えた取り組みに感動しました。家族のために、けん命に何かをしようとする人はたくさんいると思います。しかし、家族以外の人のためにこのように取り組める人は、自分に正直で、やさしい気持ちを持つ、正しいと思えます。自分のことを振り返ると、素直に自分の気持ちや伝えられなかったり、反達への口調が強くなってしまう、たりしたときがあつたように思います。自分に

正直に、そして人にやさしくすることがどれだけ大切なことなのか、この本を読んで考えさせられました。

また、岩子さんは、発想が豊かな方だと思います。外国のチャリティーを率先して取り入れ、より充実した活動になるように努力した姿は、今の世の中にも参考になることだと感じました。このような方が、わたしと同じ喜多方出身だと知り、とてもほこらしい気持ちになりました。

人を助けようとする事、人のために一生けん命に何かをしようとする事。これは、現代でもとても大切なことですが、かん単なことではありません。しかし、あきらめないうちや人に対するやさしい気持ちを持つことはできると思います。四月から、六年生になります。最上級生として、あきらめないうち何事も最後までやりとげること、下級生へのやさしい気持ちを持ち続けることをバガけたいと思います。